

つながるの昔っこ29 (昔話)

律軽のひげ殿様①

(標準語)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：みやかわ みなみ

みんなは津軽の殿様の初代を知ってるかな？

そう、為信（ためのぶ）様。

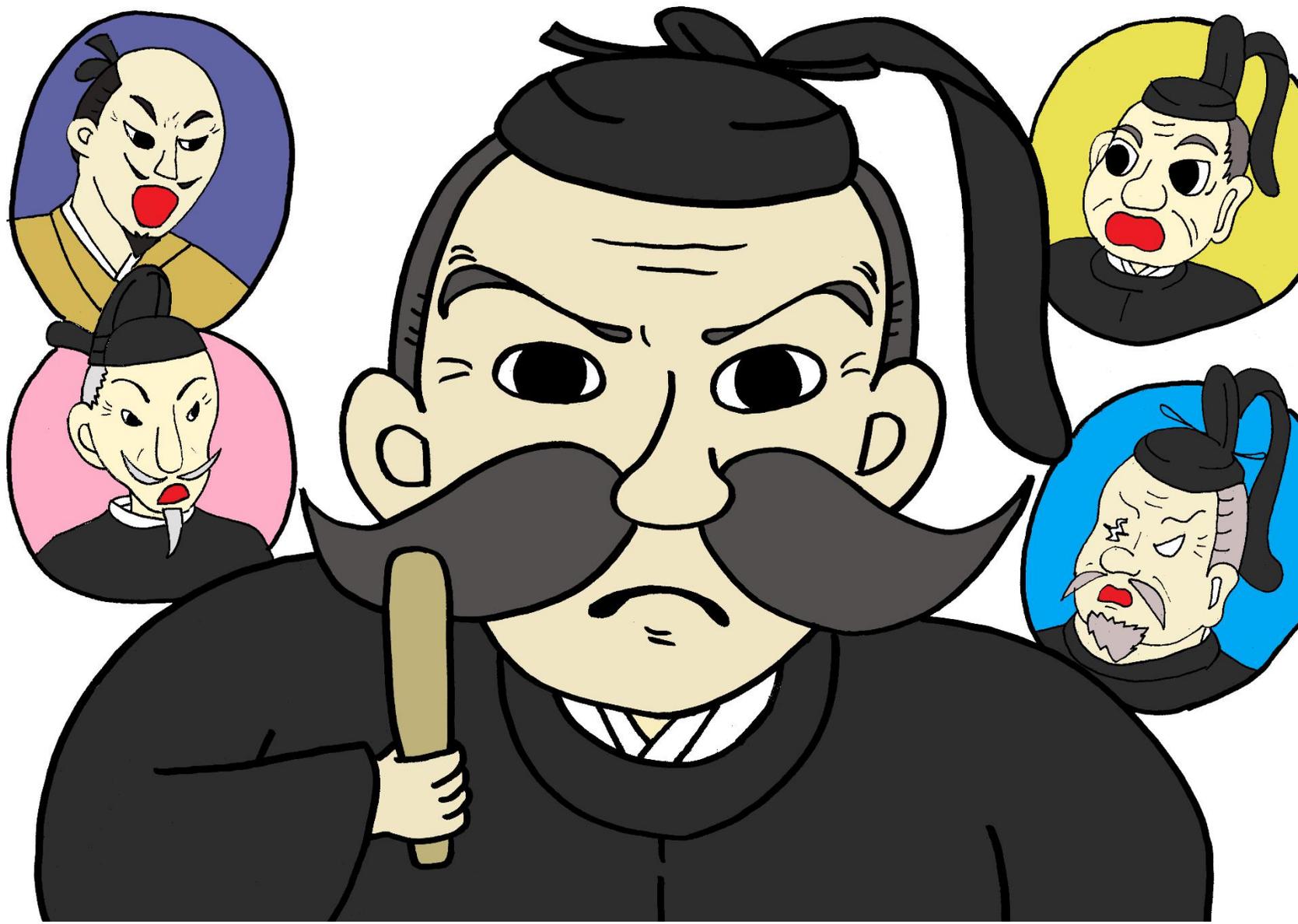
二代は信牧（のぶひら）様、三代信義（のぶよし）様、
四代信政（のぶまさ）様、五代信寿（のぶひさ）様、六代信著（のぶあき）様、
七代信寧（のぶやす）様、八代信明（のぶはる）様、九代寧親（やすちか）様、
十代信順（のぶゆき）様、十一代順承（よりつぐ）様、十二代承昭（つぐあき）様、
十三代英麿（ふさまる）様、十四代義孝（よしたか）様・・・といえます。

昔、今から百八十年前のお話。

九代の殿様の寧親（やすちか）公は立派なひげをはやしていたので、天下の大名達から「津軽のひげ殿様」と呼ばれていました。

そして、この殿様は、ものすごく意地っ張りだったので、「津軽の意地っ張り殿様」とも呼ばれていました。

剛情で、負けず嫌いな殿様だったそうです。



ある日、江戸の将軍様のお城に諸大名が集まった際に、秋田藩の殿様の佐竹様が、国許（くにもと）から届いた大きな落（ふき）を将軍様へ献上しました。
その落は、とても見事な落だったので、大名たちはみんなが誉めました。
津軽の頑固殿様、寧親（やすちか）公もそこに居ましたが、佐竹公が献上した落（ふき）を見てもまったく誉めず「ニヤニヤ」笑っていました。

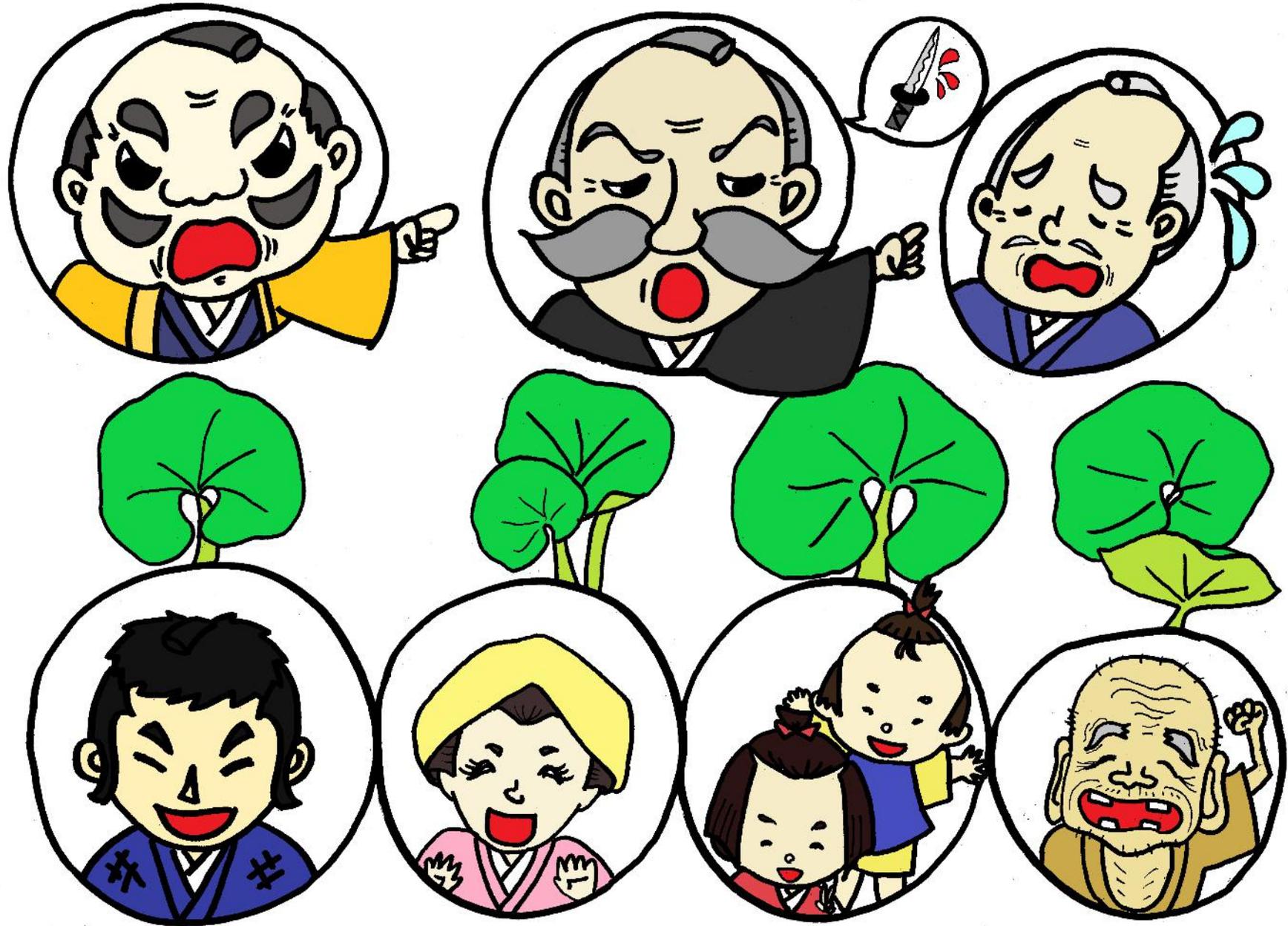


それを見た将軍様は「津軽公、何が面白いのだ？」と聞きました。
「あれくらいの落（ふき）は、津軽へ行けば鎌で刈る程ございます」といいました。

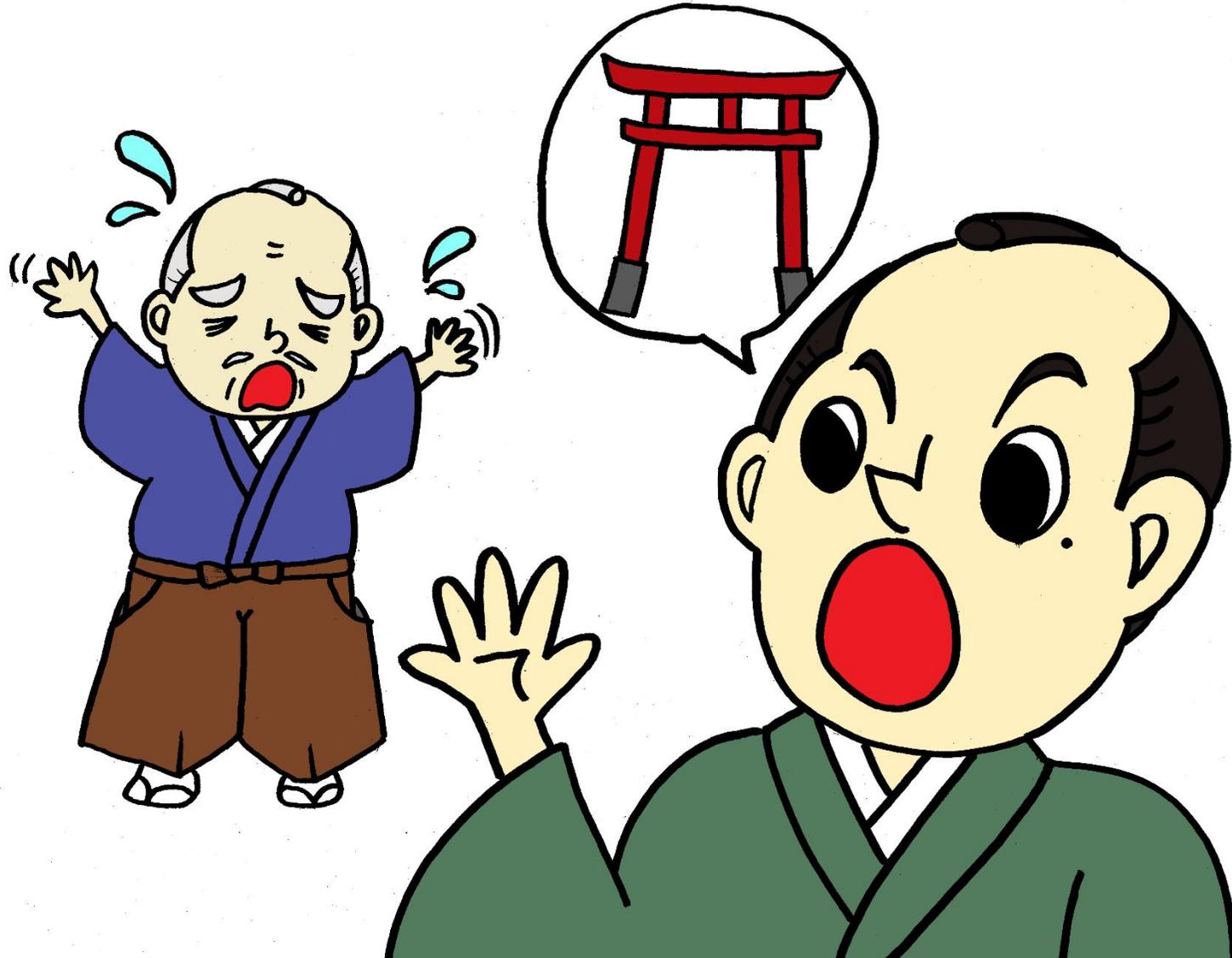
将軍様は、それを聞いて、また津軽の意地っ張りが始まったなと思ったので、
「よおし、津軽公、それならば、百日の間にこれよりもっと立派な落（ふき）を献上せよ。
もしも出来なければ、切腹を申しつけるぞ」
ときつく言いました。

津軽の殿様、『承知仕り（つかまつり）しました』と言い、すぐに江戸から津軽へ早馬を飛ばして大きい落（ふき）を探せと言いました。
殿様は家来達へ「もしも、この落（ふき）が見つからなければ、津軽家は断絶じゃ。そのつもりで、必死になって探すように・・・」と命じました。

さあ、これは大変なことになってしまいました。
国許（くにもと）の家来達は大あわてで、落（ふき）を探しに行きました。
領内のすべての侍、百姓、男も女も、子供達も、よたよた歩くお年寄りまで、みんなで山や沢
に入って落を探しました。



ところが、どうしても見つかりません。
約束の日もだんだんと近づいてきました。
家老も家来たちも、困り果ててしまって
「どうしようか？ どうしたらいいんだろうか」と相談していても、どうする事もできませんでした。
すると、一人の家来が家老に
「このような困ったときに、津軽藩を代々守ってくれている、赤倉様をお願いしてみてもどうでしょうか」と言いました。



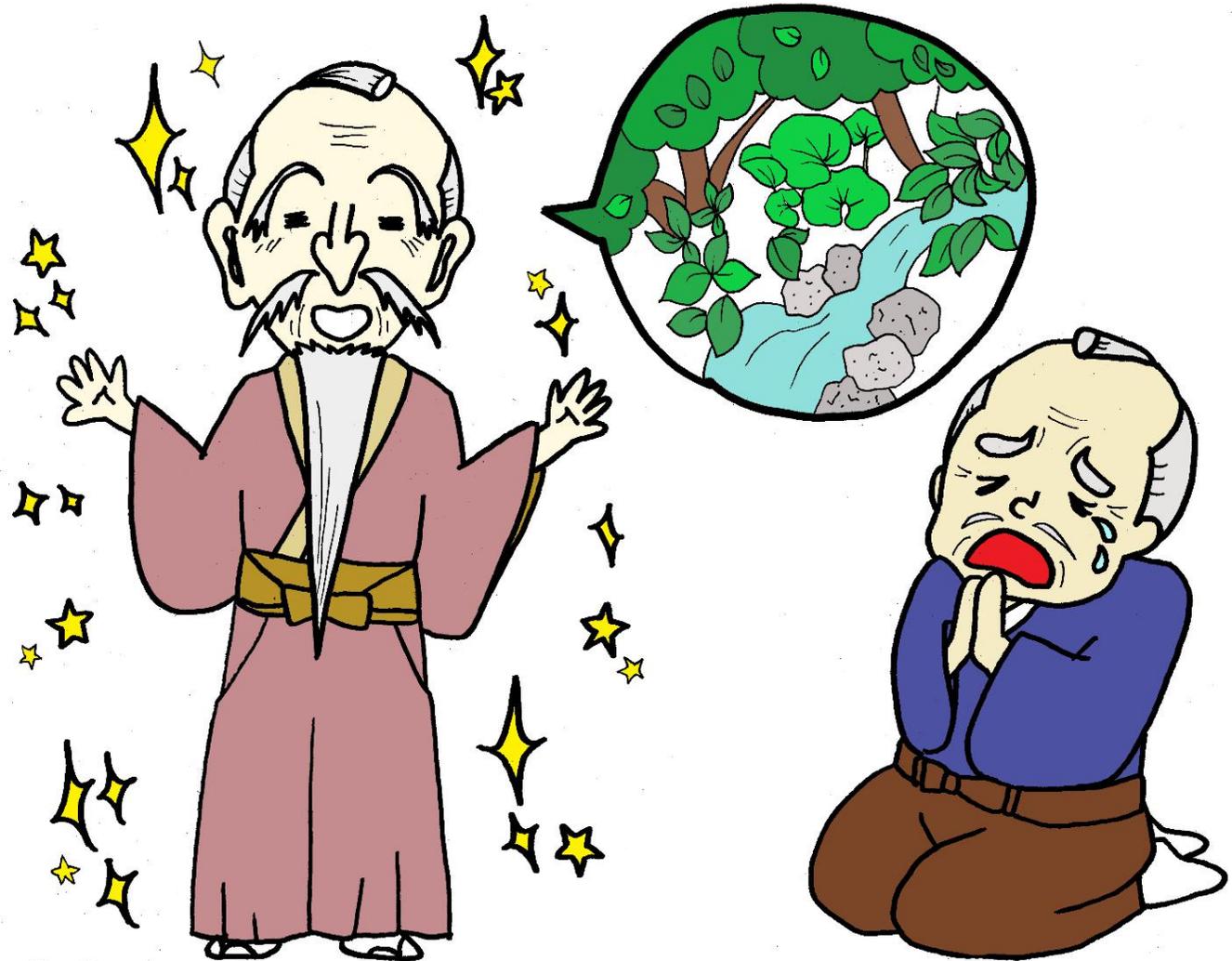
そこで、みんなで赤倉様へ行き、一生懸命、一生懸命にお祈りしました。

毎日毎日お祈りをして、ついに満願の日になりました。

家老様がお堂の中で必死になって拝んでいると、目の前に、白い着物を着て、長いひげをたらし、神々しい爺様がスーッと現れて立ちました。

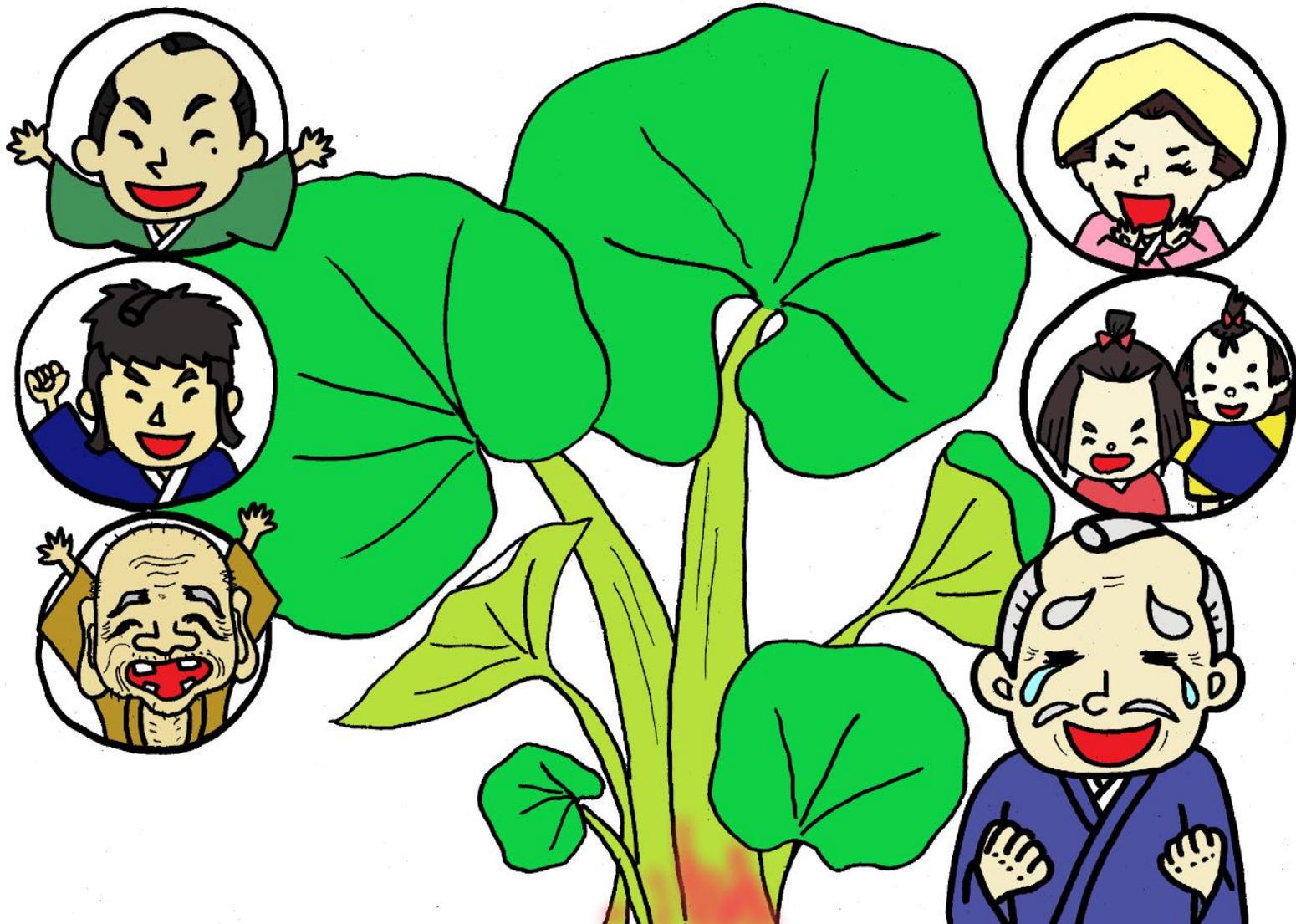
それは赤倉様でした。

「今回の、津軽の難儀を見捨てる訳にはいかないので、赤倉沢の中腹に路を植えておいた。明日行ってみるがよい」と言い、スーッと消えました。



家来達は大喜びで、さっそく赤倉沢へ探しに行きました。
すると、そこには落がたくさん生えている箇所があり、その中には特に立派な落が2本ありました。
それは、とてもとても大きな落でした。

特別に作った長持ちに、根を付けたままの落を入れて、家老は大急ぎで江戸まで運ばせました。



それは、ちょうど九十九日目に江戸へ到着し、将軍様へ献上されました。
これを見た将軍様は、あっけにとられたり、喜んだり。
「津軽の落はいちだんと見事じゃ」と誉めました。



実のところ、津軽寧親（やすちか）公は、待てども待てども落が届かないので、内心ハラハラしていました。

「ホラを吹いたり、意地をはらなければよかったなあ。わしの意地っ張りのせいで、今、国許は大変なことになってるだろうなあ」

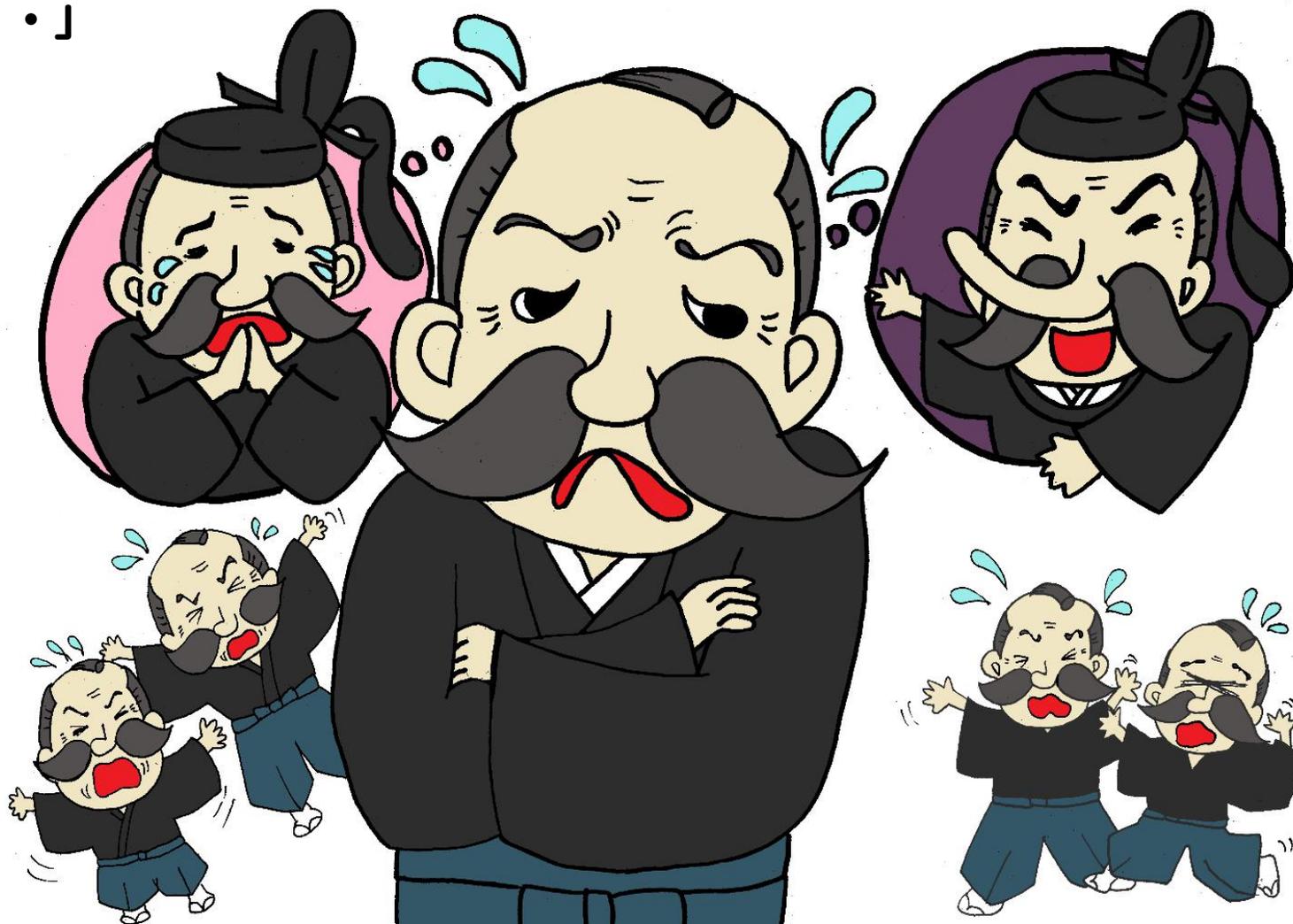
と後悔しましたが、どうすることもできません。

七十日が過ぎ、八十日が過ぎ、九十日が過ぎました。

「ああ。これで津軽もおしまいかな。

私も、もうすぐ腹を切らなければならない。

皆の者、許しておくれ・・・」



そうこうしていると、あと一日残して、大きな落（ふき）が届きました。
將軍様からもお誉めの言葉をいただいた津軽公は
「なあに、これくらいのもの・・・」と言いかけて、あっ！と天井を見上げました。

津軽の殿様の眼には、キラキラと光るものがありました。

